

雜載

五十けん 平松屋 田 中 竹 屋 同 岡崎屋 土手下 武藏屋
 同 鎌倉屋 淺田町 岩 本品 川 いづみ屋 四ッ谷 葛屋
 北高輪 天満屋 南高輪 久村屋 四ッ谷 あら木 土手下 き屋
 同 三の屋 同 いせ屋 小塚原 丸 屋

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕康應元年三月四日夜ぶかく都を出させ給ふ○足利義満中略十一日御社ふしおが
 ませ給て、御前の濱の鳥居のほとりよりかごにて御舟にうつらせ給ふ、

〔板坂卜齋記中〕大谷刑部少輔降吉は合戦負に成て馬上にて腹を切候と、和泉守記録にあり、刑部
 煩にて盲目なれば、合戦場へ乗物にて出、負に成たらば申候へと、五助と申侍に被申渡、合戦負歟
 と再三被尋候、五助未と申、必定負の時に、御合戦御負と申候處、乗物より半身出掛り、首を被爲打
 候となり、○中略

安國寺○惠は、毛利宰相殿元秀騎馬と一ツに、十六日に、摺針を笠を被り、黒き羽織にて通候由沙
 汰あり、其後十日計りも行方不知京なる雑色ども、御奉公の手立に、京近き在所方々何となく尋
 廻り候に、鞍馬寺の月性院に忍んで被居けるが、尋廻て候を聞て、乗物に乘京を指て被出候由、跡
 より人々追掛候を聞て、六條本願寺西門跡屋敷へ乗物かき居候やらん、かき捨候歟不慥、乗物搔
 も手前の者歟、人足か駈と不知、小性壹人附申候、強く被追掛、乗物より御出候へと申、既に乗物よ
 り被出候處を、右の方より小性立寄、一刀に首と思ひ切候へば、刀は乗物屋根に當り、首にてはな
 く、安國寺の右の頬先を少し切候、

〔落穂集六〕以前御當地男女衣服之事

一問云、於御當地貴賤男女衣服等の儀は、以前と只今と相變儀は無之候哉、答云、左のみ替りたる
 儀は無之候、但我等○大導寺友山の承傳たる儀有之候、○中略七十年計以來は、○中略輕々の者の女房むす